



アイヌ民族とポーランド人

現代ポーランドと日本に  
ピウスツキは何を遺したか  
〈ウェブセミナー〉

先川 信一郎



The legacy of Bronisław Piłsudski in contemporary Poland and Japan と題するウェブセミナーが 2020 年 12 月 18 日開かれ、アイヌ民族研究の先駆者として知られるポーランドの人類学者ブロンスワフ・ピウスツキ (1866~1918) の今日的な意義や、アイヌの人たちの先住民としての権利について、日本とポーランドの関係者が熱心に意見交換しました。

共催：ポーランドの現代舞踏劇団「アマレヤ」/CEMiPoS (環境とマイノリティー政策研究センター) ほか

後援：北海道ポーランド文化協会

ポーランドからは「アマレヤ」代表のカタジナ・パストウシヤクさん=上写真下左2=、元駐日ポーランド大使でユゼフ・ピウスツキ博物館学芸員のヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカさん、AGORA Publishing House 編集長のパヴェウ・ゴズリンスキさん、クラクフの日本美術技術博物館 Manggha 副館長のカタジナ・ノヴァクさん、日本からはアイヌ女性会議代表の多原良子さん、北海道新聞編集委員の小坂洋右さん、および高知工科大学の先川が参加。CEMiPoS のマシヤット・ザーマン研究員=中右2=と丸山博所長(室蘭工業大学名誉教授)=中左2=の司会、2人のポーランド人の通訳で進められ、フェイスブックのライブストリーミングを通して世界に配信されました。\*(ライブ視聴約 60 人、2021/4/15 現在 再生 2,015 回)

ウェブセミナーでは、まず先川=上左2=が「B・ピウスツキはアイヌ民族とポーランドのミッシングリンクをつなぐ存在である」と指摘し、両国の研究者の協力により、1977 年にアダム・ミツキェヴィチ大学で見つかったピウスツキのロウ管から、樺太アイヌ語などの音声の復元に成功したことを説明しました。

小坂編集委員=中左1=は、狩猟、採取、漁労、交易をしていた 850 人の樺太アイヌの人たちが、1875 年の樺太千島交換条約を契機に対雁に強制移住させられ、日露戦争後に南樺太が日本領になると樺太に戻ったものの、1945 年に旧ソ連軍の占領で日本に再移住させられた経緯を解説しました。

そのあと小説『熱源』で直木賞を受賞した作家の川越宗一さん=右写真=がビデオメッセージを寄せて「実在した樺太アイヌのヤヨマネクフ(山辺安之助)とピウスツキを描くことで被支配者が困難の中でも生き延びたモチベーショ



ンについて考えたかった。このような運命をたどった人たちを広く知ってほしい」と語りました。

また多原さん=上右1=は、北方領土ビザなし交流で 2019 年5月に色丹島斜古丹を訪れアイヌ民族の墓標の前で初めて供養を行ったことを報告。北千島アイヌが 1884 年に色丹島に強制移住させられ、1945 年には旧ソ連軍に島を追われるなど、日本とロシアに翻弄された祖先の過酷な運命を振り返りました。

ゴズリンスキさん=下右2=は自著『Akan』に「ピウスツキとアイヌ民族、ロウ管だけでなく、植民地主義、思想的背景など複合的な内容を現代の問題として盛り込んだ」と明かしました。

続いてロドヴィッチさん=下右1=が、ピウスツキについて「記憶とインスピレーション」を語ることが重要だと指摘し、その著作や研究論文の刊行が近年両国で増えていることを歓迎しました。さらに「兄弟がたどった数奇な運命や、女性の視点からピウスツキとチュフサンマがなぜ別れたかについて深く知りたい」と述べました。

ノヴァクさん=下左1=は、1999 年に第3回ピウスツキ国際会議と展示会がクラクフとザコパネで開かれ、マイェヴィチ教授やクチンスキ博士らが研究に重要な役割を果たしたこと、2017 年には Manggha 館一行が道内各地のアイヌ関係の博物館を訪問調査し、2018 年にも Manggha 館で第4回国際会議と展示会が催されたことを紹介しました。

あっという間に3時間が過ぎてしまい、結論から言えば、ピウスツキを介して双方の「連帯」を確認し、協力を誓い合ったウェブセミナーでした。

早くコロナが収まり「アマレヤ」が再びアイヌの人たちと交流できる日が来ることを切に願っています。

(さきかわ・しんいちろう、高知工科大学客員教授)